

1. 現在の発掘調査状況 (C区)

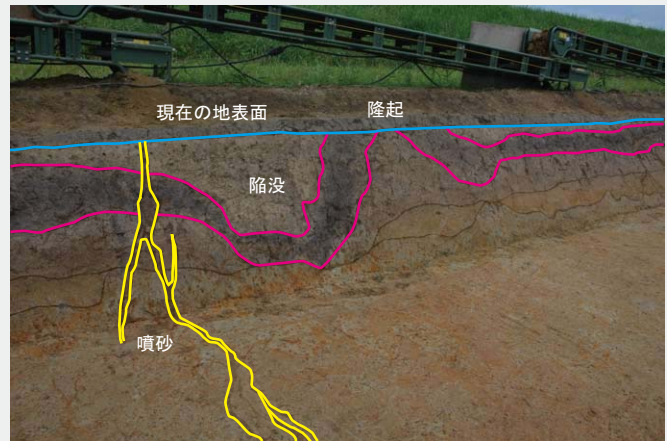
土橋北遺跡 C 区では、江戸時代 (約 400 年前) の調査が終わり、現在は縄文時代晩期 (約 2,500 年前) の面を調査しています。遺物は、土器・石器が出土していますが、数か所にまとまって出土します。

調査区では地震の痕跡が多く見つかります (第 2 図)。いつの時代の地震かを判断することは難しいですが、地震の影響で遺跡のようすが大きく変わってしまっていることも考えられます。

今後は、こうした痕跡も記録して、遺跡と地震との関係も明らかにしていくことも課題となっています。



第 1 図 発掘調査のようす



第 2 図 地震の痕跡

2. 江戸時代の道路

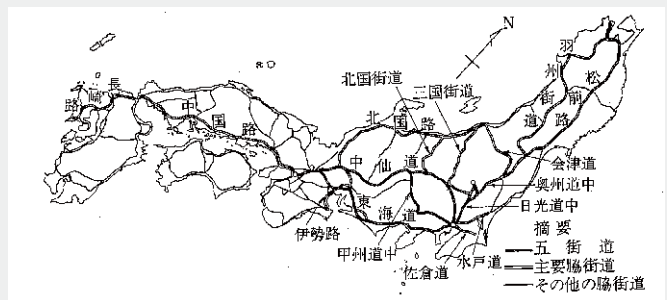
前号の発掘調査だよりでは、江戸時代の百津村について触れました。今回は、その中でも道路をとり上げたいと思います。

江戸時代に入ると、幕府は道路を整備して行きます。もっとも重要な道路には、東海道や中山道などのいわゆる五街道があります。また、五街道には脇街道が接続して、全国に交通網がめぐらされていました。県内には、北国街道・三国街道・会津道 (会津街道) の 3 つの脇街道があり、これらは佐渡を終点とすることから佐渡路・佐渡三道などと言われています (第 3 図)。

江戸幕府は佐渡奉行を置き、佐渡金山を経営していたことから、佐渡へのルートである 3 つの街道は、脇街道の中でも重要なものでした。

新発田藩では、長岡から三国街道と分岐して三条-田上-新津-水原-豊浦-新発田城下への道も慣習的に三国街道と呼んでいました。また、村上藩では新発田城-中条-黒川-村上城下への道も三国街道と呼んでいたようです。

土橋北遺跡 A 区で見つかった道路跡は、出土した陶磁器や絵図などから、この三国街道の一部であったと考えられます (第 4 図)。



第 3 図 五街道と脇街道 (武部 1992)



第 4 図 三国街道 (古澤 2011 に加筆)

3. 土橋北遺跡の道路跡について

土橋北遺跡で見つかった道路は、両側に側溝を持っています。道路は出土遺物から、約 400 年前の江戸時代初めにつくられたことが明らかになりました。これと同時期に道沿いに建物や井戸がつくられ、百津村が成立したと考えられます。

道路の埋まり方を観察すると、新しい道路と古い道路の大きく 2 回の作り換えが行われています。また、古い道路は側溝が何度か掘りなおされている跡が見られ、継続的に維持管理が行われていた様子もうかがえます。側溝は、内側より外側の方が新しい時期の陶磁器が出土しています。路面の幅も、古い道路で約 3 ～ 3.5m、新しい道路では約 5.5m となることから、徐々に道路幅を拡張していったようです（第 7 図）。

このほか、平成 27 年度の調査では、道路わきから江戸時代に流通した寛永通宝が束になって出土しました（第 8 図）。寛永通宝は、出土状況から、ひもを通していたものと考えられます。民俗例では、村に災いを及ぼすものが入ってこないように、道のわきに銭を置くことがあったようです。土橋北遺跡で出土した寛永通宝も、こうした習俗と関係があるかも知れません。

4. まとめ

土橋北遺跡で見つかった江戸時代の道路は、分田―百津―中島間を通る三国街道の一部であったと考えられます。発掘調査によって、道路の構造やその維持管理・習俗など、絵図だけではわからないことも明らかになり、江戸時代における百津村の人々の生活の一端を垣間見ることができます。

参考文献

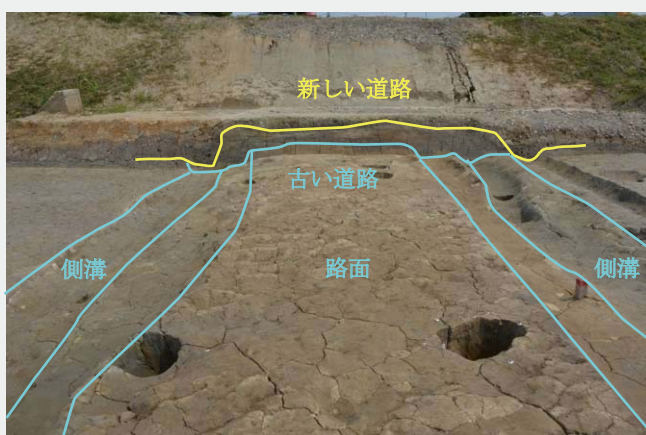
- 古澤妥史 2011 『水原代官所跡発掘調査概要報告書』
武部健一 1992 『道のはなし I』
八木康幸 1984 「村境の象徴論的意味」『人文論究 34 (3)』
新潟県教育委員会 1993 『新潟県歴史の道調査報告書第四集』
新潟県教育委員会 1995 『新潟県歴史の道調査報告書第八集 三国街道中通り』



第 5 図 三国街道（百津町周辺）



第 6 図 土橋北遺跡 A 区と三国街道（南から）



第 7 図 道路跡（南から）



第 8 図 古銭（寛永通宝）出土状況